研 究

家庭の経済的ゆとり感と育児不安・育児困難との関連

一幼児の母親への質問紙調査の分析より一

山本 理絵, 神田 直子

[論文要旨]

家庭の経済的ゆとり感と育児不安・困難の内容および支援ニーズとの関連を明らかにすることを目的とし、4歳児と6歳児の母親を対象とした質問紙調査の結果を分析した。育児不安を構成する3因子が見出され、経済的にゆとりのない群は、「育児への価値付けのなさ」以外の「育児期生活不満」と「自信のなさ」において育児不安得点が高かった。また、「相談できる人が身の回りにいない」人の比率および、子どもが「遊び場や友だちの家に行く機会がほとんどない」人の比率が高く、子どもに対するマルトリートメントの傾向のある母親の比率が高かった。さらに、この群は、緊急時の預け先や子育ての情報をより必要としていた。経済的ゆとりがない層のこのような育児不安・困難・支援ニーズの特徴をふまえて、子育て支援をしていく必要がある。

Key words: 育児不安, 育児困難, 子育て支援, 家庭の経済的状況

I. 研究目的

育児不安に影響を及ぼす要因は、親の子育てを支える人間関係、母親の性別役割分業意識・母親役割意識、親自身の育ち、他の子どもとの比較、子どものもつ特徴、育児情報過多の現代社会の問題など多様であり、それぞれの角度から研究されてきた。しかし、家庭の経済的な問題、経済的階層性の視点からの育児不安や子育て支援の調査研究は少ない。

近年の家庭の経済状態については「平成16年 国民生活基礎調査」によれば、平成15年の全世 帯の1世帯当たり平均所得金額は579万7千円 となっており、7年連続減少していた。経済的 に「苦しい」と答えた世帯の割合は、「児童の いる世帯」では63.1%、母子世帯では85.9%で あり、2003年以降増加していた。また、4歳児 の親を対象とした「第5回21世紀出生児縦断調査」の結果によれば、子育て費用を負担に思うのは66.4%で、「保育所や幼稚園にかかる費用」が最も多く、80.7%(上位3つまでの複数回答)であり、保育料・授業料の負担感をもっている親は多かった¹⁾。そのような経済的要因も育児不安・困難に影響を与えると予想される。

経済格差の大きい米国では、貧困(poverty)と子どもの発達や親としての育ちとの関連の研究が多くなされてきた。それによると、米国の2歳未満の子どもの1/4にあたる175万人が、貧困ラインで生活しており、とりわけ生後の5年間の貧困条件は、非常に大きな影響を子どもの発達に対して与えること²⁾、経済的ゆとりのなさは、その1点だけで子どもや親に影響を与えているのではなく、それに関連してさまざまなマイナス要因が複合して慢性的に引き起こされ

Relationships between Family Economic Hardship and Maternal Anxiety and Difficulty of

Child-rearing

受付 07. 8.16

[1959]

Rie Yamamoto, Naoko Kanda

採用 07.11.18

愛知県立大学 (研究職)

別刷請求先:山本理絵 愛知県立大学文学部 〒480-1198 愛知県愛知郡長久手町大字熊針字茨ヶ廻間1522-3 Tel: 0561-64-1111 Fax: 0561-64-1106 ていき, それが親と子どもの発達を阻害していくことが指摘された³⁾。

「格差社会」が進行しつつある日本において も、この方面からの分析が必要であるが、その 嚆矢となるものは、岩田のインタビュー法によ る調査4, 垣内の3歳未満児を持つ川崎市内の 家庭への調査である50。後者では、「子どもの 育ちへの不安は最も収入の低い階層が突出して いる。しつけに体罰を用いるなどについては低 収入層ほど『叩く』ことを容認する傾向にあり. 自らの子育ての自己評価も低い。また、最も低 い収入の階層は社会的に孤立する傾向がみられ る」と述べていた。この調査は階層性の視点か らのデータとしては非常に興味深いものである が、「保育要求地域実態調査」として行われた。 したがって,不安,自己評価,孤立に関する質 問項目として分析されているものは、各々1つ だけであり、 育児不安や地域でのつながりとい う点ではさらに詳細に多面的に検討する必要が あろう。

育児不安の内容については、これまで多くの研究の蓄積があり、質問項目や内的構造が提起されてきた。それらをもとに、どのような内容の不安や困難が経済的要因とより関連してわり、どのような支援がより求められているのかを明らかにできるなら、家庭の経済的状況ののが点からの子育で支援の方法に示唆を得ることができると考えた。そこで本研究では、次の2点を研究目的とした。①育児不安の内容を構造的とした。②育児不安との関連を明らかにする。②育児不安とりとの関連を明らかにする。②育児不安とりをで見速な状況および支援ニーズと、経済的ゆとりとの関連を明らかにする。

Ⅱ. 研究方法

1. 調査対象および方法

本研究で解析したのは、幼児の母親を対象とした質問紙調査「愛知の子ども縦断調査」の第3回目の調査結果の一部である^{6.7)}。第1回目は2001年2月に、愛知県内12カ所の保健センターの健康診査(1歳半児健診、3歳児健診)受診者およびフォローアップグループ参加者を

対象に子育て状況と親の育児不安・困難感・支援要求などに関する調査を行った。配布は保健センターを通し、対象者自身の郵送にて回収した。配布数は2,519名,有効回答数は1,457件(回答率57.8%)であった。この第1回目の調査回答者のうち、継続調査に同意した人を対象に、その後3回(2002年,2004年,2007年)調査を行った。

第3回調査は、配布数1.115名、有効回答数 は母親が回答した907件(回答率81.3%),調査 時期は2004年2月であった。第1回調査回答時 に継続調査協力に同意し、郵送可能であった人 に質問紙を配布したので、回答率は高かった。 本研究で分析の対象としたのはそのうち、1回 目調査(2001年)回答者と対照できた4歳児(372 名) および6歳児(395名)を持つ母親計767名 であった。2001年の調査時に対象児のほとんど が1歳半児健診と3歳児健診受診者であったの で、2004年の本調査での対象児の月齢のピーク は4歳7か月と6歳1か月(6歳児のうち98% は6歳6か月未満)であった。有効回答907件 のうち5歳児と7歳児が5%いたが、1回目調 査時のフォローアップグループ参加者だと考え られるので、そのケースは分析の対象から外し た。

2. 質問内容

- ① フェイスシート
- ② 育児不安;これまでの育児不安に関する先行研究(牧野⁸⁾,吉田ら^{9,10)},桜谷ら¹¹⁾)を参考に28項目を設定した。各項目の回答に1点から4点(1.全くない~4.よくある)を与えて育児不安得点とした。得点が高いほど育児不安が高いことを示す。
- ③ マルトリートメント (虐待につながる不適 切な育児行動): 質問2項目について, 4件 法(1.全くない~4.よくある)で回答を得た。
- ④ 家庭の経済的ゆとり感;「差し支えなければ、あなたのご家庭の経済状況をおきかせください」という質問に対し、4件法(1.かなりゆとりがある~4.ゆとりがない)で回答を得た。このような質問は実際の収入金額などに比べ客観性はないが、子ども数や年齢等によって必要な金額が異なり、精神的ゆと

りにもつながる尺度でもあると考えた。本調査では家庭の経済的ゆとり感がどの程度あるかという視点から群を作成した。

- ⑤ 近隣地域でのつながり;母親の育児不安と近所づきあいの関連を探った牧野⁸⁰,諏訪ら¹²⁰の研究を参考に、「子ども連れで遊びに行ける家が近所にあるか」、「子どもを預かり合う家があるか」、「子育てについての悩みや心配事を相談できる知人が身の回りにいるか」について2件法(1.ない、2.ある)で、また「子どもが遊び場や友だちの家へ行く機会」について4件法で回答を得た。
- ⑥ 支援ニーズ;地域の支援機関に対する支援 要求9項目(「育て方やしつけについて相談 する人や機関」「専門家の話を聞く機会」、「用 事がある時子どもを預かってくれる所」、「育 児を休みたい時子どもを預かってくれる所し 「他の母親との交流」、「子育て情報について のわかりやすい説明」、「子育てから離れてリ フレッシュ」、「安心して遊べる遊び場」、「入 学にあたっての相談相手」). および幼稚園や 保育園に対する子育て支援要求4項目(「保 育時間延長」、「家族が病気の時などに子ども を預かってほしい」、「子育て相談ができる場 に」、「保護者同士の交流の支援」)について それぞれ4件法(1.とてもそう思う《必要 とする》~4. 全くそう思わない《必要ない》) で回答を得た。

⑦ 自由記述

3. 統計解析

育児不安に関する質問項目の因子分析は、主因子法・Promax 回転を行い、因子負荷量0.35以上の項目を採用し因子を決定した。また因子別に構成する項目の内的整合性を Cronbach のα係数で評価した。因子ごとに育児不安得点を合計し、下位尺度得点を算出した。経済的ゆとり感 3 群の育児不安下位尺度得点差の検定にはWelchの検定、その後の多重比較は Games-Howell の検定を用いた。比率の差の検定にはχ²検定を用い、相関については Pearson の相関係数を求めて検定した。解析には SPSS 11.5 for Windows を用いた。

4. 倫理的配慮

「愛知の子ども縦断調査」では、第1回目の 対象者に調査の趣旨を記した文書を手渡し. 同 意を得た人から回答を郵送してもらった。質問 項目の最後に、次回の調査参加も尋ね、了解し て住所氏名を記した人を次回継続調査対象者と した。調査票の表紙には、調査者の氏名・連絡先・ 研究の趣旨および個人情報の保護を表記し. さ らに調査結果は学術研究として発表するほか. 地域の子育て支援プランづくりなどに活かすこ となど記した。各回の回答データを個人ごとに 連結する作業の時のみ氏名等を使用し、データ ベースでは氏名を削除しID番号により管理し、 匿名化した。研究成果は、著者らが関与する子 育て支援の研修や次世代育成支援対策推進協議 会等を通して子育て支援施策や活動に反映させ ていく。

Ⅲ. 結 果

1. 対象者の特徴

回答者である母親の年齢は、29歳以下56名 (7.3%)、30~34歳354名 (46.2%)、35~39歳281名(36.6%)、40歳以上68名(8.9%)であった。母親の就労状況は、有職者 (フルタイム、パートタイム、自営業、内職等)は399名 (52.0%)、専業主婦335名 (43.7%)であった。対象児の就園状況は、幼稚園373名 (48.6%)、保育所345名 (45.0%)、未就園47名 (6.1%)であった。

母親が就労している家庭のうち保育園を利用していない家庭が31.9%あった。ひとり親(母子)家庭は4.8%(37名)であった。

2. 家庭の経済的ゆとり感

家庭の経済的ゆとり感について質問した結果、「ゆとりがない」84名(11.5%)、「あまりゆとりがない」336名(45.8%)、「少しゆとりがある」296名(40.4%)、「かなりゆとりがある」17名(2.3%)であった。「ゆとりがない」群の14.3%は、ひとり親世帯であった。「かなりゆとりがある」は、実数が少なかったため、以後の分析では除外して処理した。

3. 経済的ゆとり感と育児不安との関連

育児不安に関する質問28項目に対して因子分

析を行った。いずれの因子についても十分な負荷量を示さなかった 2 項目(「子どもから離れて外出心配」と「子育てが昨年より楽になった」)を分析から除外し,再度同様の手法で因子分析をした結果,表 1 の 3 因子構造が見い出された。第一因子は育児期の生活に伴う心身の疲れや閉塞感に関する「育児期生活不満」,第二因子は,子育てへの満足感・価値付けに関する「育児への価値付けのなさ」,第三因子は,自分の育児に対する自信のなさや不安に関する「自信のなさ」であった。また,Cronbach の α 係数は、それぞれ0.89,0.86,0.83と十分な値が得られた。各因子間の相関係数は,0.49から0.59と比較的強い正の相関があった。

3因子を育児不安の下位尺度として,各下位 尺度ごとの合計得点を算出した。この育児不安 下位尺度得点は3群の経済的ゆとり感によっ て異なるかどうかを検討するため,分散分析 を行った。3群は等分散性がないため,Welch の検定を加えたところ,「育児期生活不満」尺 度と「自信のなさ」尺度において,平均値に有 意な差がみられた(それぞれ1%水準,5%水 準)。「育児への価値付けのなさ」では有意な差 がみられなかった。

さらに、群間に平均値の差が認められた2つの尺度について Games-Howell の多重比較を行った結果、「育児期生活不満」尺度では経済的に「ゆとりがない」群の育児不安得点は「少

表1 育児不安に関する質問項目の因子分析結果

育児不安項目	因子1	因子 2	因子 3
誰も子育ての大変さをわかってくれないと思う	0.708	-0.107	0.010
一人で子育てしているという圧迫感	0.697	-0.042	-0.004
心満たされず空虚である	0.668	0.087	0.030
身体の疲れがとれずいつも疲れている感じ	0.655	-0.141	0.026
毎日生活していて心に張りが感じられない	0.632	0.121	-0.009
社会的に孤立していると思う	0.594	-0.129	-0.025
子育てを離れ一人になりたい気分になるときがある	0.578	0.160	-0.017
育児や家事など何もしたくない気分になる	0.578	0.007	0.092
子どもに時間がかかり、自分のやりたいことができずあせる	0.561	0.015	0.012
夜れやストレスがたまってイライラする	0.546	0.065	0.093
子どもが煩わしくてイライラしていまう	0.442	0.198	0.148
ー日が充実していてハツラツとしている *	0.365	0.323	0.009
子育ては自分にとってやりがいがあることだと思う *	-0.800	0.865	-0.084
子どもを育てるのは楽しい*	-0.017	0.740	-0.007
子どもを宝物のように感じる*	-0.034	0.693	-0.112
子どもを産んで良かった*	0.015	0.647	-0.052
子どもといるとゆったりした気分になる*	0.143	0.627	-0.146
自分は育児に向いていると思う*	-0.178	0.618	0.244
育児で自分が成長していると感じられる*	0.032	0.591	-0.033
自分は子どもをうまく育てていると思う*	-0.211	0.493	0.423
子育ては自分に合っていないので、早く好きなことしたい	0.335	0.445	-0.027
	0.020	-0.089	0.825
自分は子どものことがわかっていないのではないかと思う	-0.046	0.041	0.748
子どものことで、どうしたらよいかわからなくなることがある	0.106	-0.058	0.728
子どもを育てる自信がなくなることがある	0.105	0.052	0.679
自分の子育てについて周りにどう思われているか気になる	0.091	-0.176	0.505
α係数	0.886	9 0.8568	0.827
因子間相関	因子 1	因子 2	因子 3
:	因子 1 因子 2	0.589	0.586

因子抽出法:主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

*は逆転項目

平均值 度数 標準偏差 Welch の検定 多重比較 ゆとりがない 82 30.79 7.59 あまりゆとりがない * * 28.90 5.90 343 育児期生活不満 少しゆとりがある 292 27.91 6.09 全体 28.71 6.25 717 ゆとりがない 82 17.91 5.27 あまりゆとりがない 337 17.42 4.09 n.s n.s 育児への価値付けのなさ 少しゆとりがある 288 16.96 3.82 全 体 707 17.29 4.15 ゆとりがない 83 12.57 3.58 あまりゆとりがない 12.41 2.70 347 自信のなさ 少しゆとりがある 296 11.89 2.83 全 体 726 12.21 2.87

表2 経済的ゆとり別育児不安得点

* p < .05, ** p < .01

しゆとりがある」群より有意に高かった(1%水準)。また「自信のなさ」尺度では、「あまりゆとりがない」群の育児不安得点は「少しゆとりがある」群より有意に高かった(5%水準)(表2)。

4. 経済的ゆとり感と近隣地域でのつながりとの関連

母親が持っている身の回りのつながりと家庭の経済的ゆとり感との関連をみるため、近隣地域でのつながりに関する 4つの質問項目を経済的ゆとり感とクロス集計した。 χ^2 検定の結果、「相談できる知人が身の回りにいるか」と「子どもが遊び場や友だちの家へ行く機会」に、有意差が確認された(表 3, 4)。「ゆとりがない」群は、相談できる身近な知人が「いない」比率が高く、子どもが遊び場や友だちの家へ「ほとんど行かない」人の比率は22%と高かった。

5. 経済的ゆとり感と子どもを叩くこととの関連

育児困難の状況に関して子どもの養育態度・マルトリートメントの視点から、「子どもをつい叩いてしまうことがある」、「とめどなく叱ったり叩いたりする」の質問をした。2つの質問項目を、それぞれ経済的ゆとり感とクロス集計しど検定をした結果、両者とも有意差が認められた。「ゆとりがない」群では、「子どもをつい叩いてしまうこと」も、「とめどなく叱ったり

表3 経済的ゆとり別相談できる身近な知人の有無 人(%)

	いる	いない	合計
ゆとりがない	70 (84.3)	13(15.7)	83(100.0)
あまりゆとり がない	324 (94.5)	19(5.5)	343(100.0)
少しゆとりが ある	283 (95.0)	15(5.0)	298(100.0)
全 体	677 (93.5)	47(6.5)	724(100.0)

 $\chi^2(2) = 13.056$ p < .05

表4 経済的ゆとり別遊び場や友だちの家へ行く頻度

人(%)

	ほぼ毎日	週に2~4日	たまに	ほとんど行かない	合 計
ゆとりがない	10(12.2)	16(19.5)	38(46.3)	18(22.0)	82(100.0)
あまりゆとりがない	50(14.6)	112(32.7)	146(42.7)	34(9.9)	342(100.0)
少しゆとりがある	36(12.1)	107(36.0)	120(40.4)	34(11.4)	297(100.0)
全体	96(13.3)	235 (32.6)	304 (42.2)	86(11.9)	720(100.0)

 $\chi^2(6) = 14.890 \quad p < .05$

表5 経済的ゆとり別マルトリートメントの頻度

人(%)

		よくある	ときどきある	あまりない	全くない	合 計
	ゆとりがない	6(7.1)	34(40.5)	25(29.8)	19(22.6)	84(100.0)
子どもをつい叩いてしま	あまりゆとりがない	9(2.6)	155(44.7)	145(41.8)	38(11.0)	347 (100.0)
$\chi^2(6) = 16.269^*$	少しゆとりがある	10(3.4)	138(46.3)	101 (33.9)	49(16.4)	298 (100.0)
	全 体	25(3.4)	327 (44.9)	271 (37.2)	106(14.5)	729(100.0
とめどなく叱ったり叩い たりすることがある χ ² (6)=14.591*	ゆとりがない	6(7.1)	38(45.2)	23(27.4)	17(20.2)	84(100.0
	あまりゆとりがない	11(3.2)	138(39.8)	147(42.4)	51(14.7)	347(100.0
	少しゆとりがある	6(2.0)	103(34.9)	128(43.4)	58(19.7)	295 (100.0
	全体	23(3.2)	279 (38.4)	298 (41.0)	126(17.4)	726(100.0

*: p < .05

叩いたりすること」も、「よくある」の比率が 高かった(表5)。

また、マルトリートメントは育児不安とも関連していると考えられ、この2つの質問項目と3つの育児不安下位尺度得点の相関をみたところ、表6のようにすべて0.1%水準で弱い正の相関がみられた。

表6 育児不安得点とマルトリートメントとの相関

	育児期 生活不満	育児への価値 付けのなさ	自信のなさ
つい叩いてしま うことがある	0.306***	0.284***	0.287***
とめどなく叱った り叩いたりする	0.332***	0.321***	0.305***

Pearson の相関係数 ***: p < .001

6. 経済的ゆとり感と支援ニーズとの関連

子どもが通っている幼稚園や保育園に対する子育で支援に関する要望や、他の必要な支援について経済的ゆとり感とクロス集計した。 パ検定の結果、有意差が確認できたのは、「用事のあるときの預け先」、「家族が病気の時などに子どもを預かってほしい」、「子育ての情報についてのわかりやすい説明」であった(表7)。この3つのニーズにおいて、「ゆとりがない」群の「とても必要」の比率が高かった。

Ⅳ. 考 察

本研究では、家庭の経済的ゆとり感について「ゆとりがない」と感じている群は約11%であった。本調査とほぼ同じ対象者に3年後に実施した第4回「愛知の子ども縦断調査」(集計

表7 経済的ゆとり別支援ニーズ

人(%)

		とても必要	やや必要	あまり必要ない	必要ない	合 計
	ゆとりがない	47 (56.0)	28(33.3)	8(9.5)	1(1.2)	84(100.0)
用事のあるときの預け先	あまりゆとりがない	126(36.4)	158(45.7)	59(17.1)	3(0.9)	346 (100.0)
$\chi^2(6) = 22.204**$	少しゆとりがある	107 (36.0)	119(40.1)	59(19.9)	12(4.0)	297 (100.0)
	全 体	280 (38.5)	305 (42.0)	126(17.3)	16(2.2)	727(100.0)
	ゆとりがない	32(41.0)	22(28.2)	20(25.6)	4(5.1)	78(100.0)
家族が病気の時など園に	あまりゆとりがない	63(19.3)	145(44.5)	104(31.9)	14(4.3)	326 (100.0)
子どもを預かってほしい χ²(6)=18.568**	少しゆとりがある	60(21.7)	114(41.2)	88 (31.8)	15(5.4)	277 (100.0)
	全 体	155(22.8)	281 (41.3)	212(31.1)	33(4.8)	681 (100.0)
子育ての情報についての わかりやすい説明 $\chi^2(6)=16.785*$	ゆとりがない	24(28.6)	30(35.7)	28(33.3)	2(2.4)	84(100.0)
	あまりゆとりがない	59(17.1)	179(51.9)	102(29.6)	5(1.4)	345 (100.0)
	少しゆとりがある	38(12.8)	144(48.5)	107(36.0)	8(2.7)	297 (100.0)
	全体	121(16.7)	353 (48.6)	237 (32.6)	15(2.1)	726 (100.0)

*: p < .05, **: p < .001

中)では、年収(税込み)200万円未満が2.5%、200万~400万円未満が13.8%であり、約16%が400万円未満という結果であった。主観的にゆとりがないと感じる群がすべて低い収入とは限らないが、客観的にもかなり経済的に苦しい中での生活を強いられている人々が多く含まれていると考えられる。

育児不安に関しては、因子分析の結果、「育児期生活不満」、「育児への価値付けのなさ」、「自信のなさ」と名付けられる3つの因子が抽出された。Cronbachの α 係数から因子を構成する項目についての内的整合性は高いといえる。この3つの因子それぞれには、吉田らが試作した $1\cdot 2$ か月児と1 歳半児の母親用の「育児不安スクリーニング尺度」における「育児不安」、「育児満足」、「自信のなさ」因子の各項目がほぼ含まれており、類似の結果となった9.10)。

育児不安下位尺度得点を家庭の経済的ゆとり感 3 群で比較したところ,「育児期生活不満」尺度と「自信のなさ」尺度については,経済的に「ゆとりがない」群や「あまりゆとりがない」群の方が「少しゆとりがある」群よりも不安といるのとりがある」群よりも不安である。経済的にゆとりがないと感が強い傾向にあり,したり疲れていたり自信がなかったりは感れていたり自信がなかったりである。経済の中で子育でをすることが,育児期の生活、状況の中で子育でをすることが,育児期の生活、不満をも高める一因となっているのであろう。

一方, 育児不安の「育児への価値付けのなさ」 尺度得点については, 経済的ゆとり感による違いはなかった。吉田らの「育児不安スクリーニング尺度」では,「育児不安」と「育児満足」(子育てへの関心)という二つの次元から母親の育児意識を把握することを提起していた。本調査の「育児への価値付けのなさ」因子の項目の多くは, 吉田らの「育児満足」項目と重なり(得点化は逆転させている), 経済的にゆとりがないと感じている母親は, 子育てへの関心まで低下していないことがわかる。

地域でのつながりの点からみると,経済的に 「ゆとりがない」群は,母親自身が「相談でき

る知人が身の回りにいる」人の比率が低く、子 どもが「遊び場や友だちの家に行く機会」が 「ほとんどない」人の比率が高かった。子ども が外に遊びに出かけることが少ないことは、母 親の人間関係が狭いことと関連している。育児 不安の背景として、このようなつながりの弱さ があり、母親は精神的ゆとりがなくなり、育児 の負担も軽減されにくくなっていると考えられ る。中谷の幼児の母親を対象とした調査によれ ば、友人宅、子育て支援センター等の公共施設 の利用者は育児不安が低く、遊び場の少ない群 の方が育児不安が高いことが明らかにされてお り13)、「ゆとりがない」群の子どもが遊びに行 く機会が少ないことは、育児不安と関連してい るといえる。母親の近所づきあいの程度や対人 関係の広さが育児不安と関連があることはこれ までも指摘されたが、経済的ゆとりがなく、し かも孤立している人の場合、育児不安・困難は より強くなると考えられる。

経済的ゆとり感とマルトリートメントとの関連については、経済的に「ゆとりがない」群では、子どもを「つい叩いてしまう」ことや「とめどなく叱ったり叩いてしまう」ことが「よくある」という母親の比率が高かった。この2項目と育児不安得点(3つの下位尺度得点とも)との相関がみられたことから、経済的ゆとり感がストレートにマルトリートメント傾向に影響を及ぼすというより、経済的ゆとり感が育児不安に関連し、その育児不安がマルトリートメントに影響を与えているのではないかと考えられる。

経済的ゆとり感と支援ニーズの関係では、「ゆとりがない」群に、「用事のあるときの預け先」、「家族が病気の時などに子どもを預かってほしい」、「子育ての情報についてのわかりやすい説明」をとても必要とする比率が高かった。同調査で育児困難のリスクファクターとなりうるような子どもの特徴を多くもっていると感じている困難高群を設定して分析した際には、「子育てから離れたリフレッシュ」、「保育時間の延長」、「病気のときなどの一時保育」のニーズが高かったが、経済的ゆとりがない人の場合、リフレッシュよりも緊急の事情での預け先に困っていると考えられる。自由記述にも、経済的ゆとりがない群には、児童手当や就園援助金、

医療費, 扶養手当などの経済的支援を望む声とともに安価で子どもを預かる所を求める要望があった。また, 経済的ゆとりがない群が「子育ての情報」をより求めるのは, 地域でのつながりが薄い人の比率が高いことと関連して, 安心して聞いたり相談したりできる人が周りに少ない人が多いことによると考えられる。

V. まとめと課題

本研究では、経済的にゆとりがないと感じて いる母親の育児不安の内容や、近隣地域での孤 立の傾向、マルトリートメントの傾向を確認し た。経済的に困難な家庭に対しては、以上のよ うな育児不安・困難の傾向や支援ニーズの特徴 があることを考慮して、子育て支援にあたって いくことが重要である。とくに親の生活の大変 さや疲労感・圧迫感・孤立感を緩和するような 居場所やつながり、また、仕事や用事の際に安 心して低価格で利用できる預かりのシステムも 必要である。しかし、そのような資源があった としてもそれらをうまく活用でなければ援助に 結びつかない。十代の母親が住む集合住宅を訪 問してそこに隣接する生活支援センターに誘う カナダのファミリー・リソース・センターの「ド アノッキング」14) 子育て困難が予想される家 族に対して、出産直後の産院からコンタクトを とり、援助を強力に推し進めていくオレゴン州 「健康な出発プログラム」のように15). サービ スを提供する側から利用者側へ手をさしのべる 支援が必要であろう。

2007年度から厚生労働省の補助事業として始まった「生後4ヵ月までの全戸訪問事業(こんにちは赤ちゃん事業)」は、まさにそのようなアウトリーチ的支援であるが¹⁶⁾、訪問者は保健師等有資格者だけではなく児童委員やボランティアである場合もある。訪問に先立って必要な研修を行うこととなっているが、経済的にゆとりがない家庭の親の特徴等もふまえて家庭訪問できるよう研修を充実させることや、経済的にも子育てにおいても困難を抱えている家庭への支援の方法を検討していくことが必要である。

なお, 本調査の対象者は, 長い質問紙に熱心 に継続的に回答を寄せてくれる方々であった。 幼児の母親一般の代表というより、子育て熱心な層であると考えられるが、そのような人々の中でさえも子育て困難状況がみられた。調査対象者以外の層ではさらに広くそのような状況が存在すると予想される。

今回は2004年調査結果のみの分析であったが、今後データの縦断性を活かして、経済的ゆとり感と育児(子育て)不安、困難性、支援要求などの関連がどのように変化していくのか、そして双方を媒介する要因、関連のメカニズムがどのように異なっていくのかについて、乳児期、幼児期、学童期を通して探っていきたい。また2007年調査項目である客観的な収入と諸要素との関連についても検討していきたい。

付 記

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(c) 平成14~16年度 課題番号14510301) による調査を基にしている。本研究の一部は、2006年日本保育学会第59回大会で口頭発表した。

動 我

「愛知の子ども縦断調査」に回答してくださった 方々にお礼申し上げます。

引用文献

- 1) 厚生労働省. 第5回21世紀出生児縦断調査. 初版 東京:厚生統計協会,2007.
- Duncan GJ, Brooks-Gunn J, Yeung WJ, Smith JR. How Much Does Childhood Poverty Affect the Life Changes of Children? American Sociological Review 1998; 63 (3): 406-423.
- McLoyd VC. The Impact of Economic Hardship on Black Families and Children: Psychological Distress, Parenting, and Socioemotional Development. Child Development 1990:61 (2): 311-346.
- 4) 岩田美香. 現代社会の育児不安. 初版 東京: 家政教育社 2000.
- 5) 垣内国光. 現代の育児不安・育児困難の階層性 に関する考察—川崎市の保育要求地域実態調査 から—. 明星大学社会学研究紀要 2005;25: 21-31.
- 6) 神田直子, 山本理絵. 子育て困難を抱える親

への子育て支援のあり方. 児童教育学科論集 2001:35:21-42.

- 7) 神田直子, 山本理絵. 子どもの「育てにくさ」 と親の育児不安・マルトリートメント(2)—4歳 児と6歳児を中心に—. 愛知県立大学文学部論 集 児童教育学科編 2005;53:33-56.
- 8) 牧野カツ子. 乳幼児を持つ母親の生活と<育児 不安>. 家庭教育研究所紀要 1982:3:34-56.
- 9) 吉田弘道,山中龍宏,巷野悟郎 他. 育児不安 スクリーニング尺度の作成に関する研究―1・ 2か月児の母親用試作モデルの検討―. 小児保 健研究 1999;58(6):697-704.
- 10) 吉田弘道, 山中龍宏, 巷野悟郎 他. 育児不安 尺度の作成に関する研究—1歳半児の母親試作 モデルの検討. チャイルドヘルス 1999;2(2): 45-49.
- 11) 桜谷真理子. 子育ての危機と保育要求の深化. 鷲谷善教. 子育ての危機と保育の公的保障. 初版 東京:ひとなる書房, 1984; 19-48.
- 12) 諏訪きぬ,戸田有一,堀内かおる. 母親の育児 期ストレスと保育サポート. 初版 東京:川島 書店,1998.
- 13) 中谷奈津子. 子どもの遊び場と母親の育児不安 一母親のネットワークと定位家族体験に着目し て一. 保育学研究 2006:44(1):50-62.
- 14) 小出まみ、地域から生まれる支えあいの子育て、 初版 東京:ひとなる書房、1999.
- 15) ヘネシー澄子. 子を愛せない母 母を拒否する子. 初版 東京: 学習研究社, 2004.
- 16) 厚生労働省. 生後4か月までの全戸訪問事業(こんにちは赤ちゃん事業)(平成19年度より実施)

http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/kosodate12/01.html

(Summary)

The purpose of this study was to investigate the relationships between family economic hardship and the details of maternal anxiety and difficulty of child-rearing, and needs for child-rearing support. We conducted a survey of mothers of 4 or 6 year old children. Child-rearing anxiety was consisted of the following three factors: (1) dissatisfaction with life while caring for children, (2) lack of confidence in caring for children, and (3) viewing rearing of children as valueless. The group which had family economic hardship had higher score of (1) and (2). Additionally, this group had a high ratio of mothers who "did not have anyone close to them that they could consult" and their children had "almost no opportunity to go to a playground or friend's house." They also had a tendency to maltreat children. Furthermore, this group needed places to take their children in the case of an emergency and information about child-rearing. Child-rearing should be supported by taking into consideration the characteristics of anxiety and difficulty of child-rearing, and the needs for child-rearing support of the group that had family economic hardship.

[Kev words]

child-rearing anxiety, child-rearing difficulty, child care support, family economic hardship